

特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。 未来に何をつなぐのか 1

1901(明治34)年、『幼児の教育』は『婦人と子ども』という誌名で産声を上げました。

以来120年、本誌は変わりゆく日本の幼児教育・保育を見つめてきました。

この120年の間に、子どもも変わったのでしょうか。

あるいは、子どもは子ども、いつも変わらずにそこにいるのでしょうか。

今年は、「120年の大人と子どもの関係」を本誌の歴史と共に振り返っていきます。

今回のテーマ:

保育史と出会う奇跡

— 『幼児の教育』のバックナンバーを 検索したら驚いた

読者の皆さんは、この120年間の『幼児の教育』のバックナンバーを、今すぐ手軽に、自由に検索して読めることをご存じでしょうか。

1世紀以上の時を超えて、明治期の保育者の思い、あどけない子どもの姿、戦争や災害の中で思い悩んだ研究者、わが子の幸せを願う親たちと、すぐに対面できるのです。今回は『幼児の教育』をSNSで検索して読んだらこんな120年と未来が見えてきた、という話をしてもらいました。



座談会 2021

『幼児の教育』の バックナンバーを検索したら 驚いた

浜口順子
久保健太
宮里暁美
阿部祐美子
(発言順)

『幼児の教育』の120年

浜口 今年2021年は、『幼児の教育』創刊120年です。それで、この春号の表紙は、創刊号の表紙（荒木十畝／絵 画像1）をリメイクしたものにしました。今日は、その120年の歴史を振り返るといふ意味でも、昔の記事をいつでも手軽に引き出して読むことのできるアーカイブズ・サービスについて皆さんと自由にお話ししたいと思います。

久保 昔の記事を手軽に検索して読めるのはとても貴重だし興味深いです。創刊



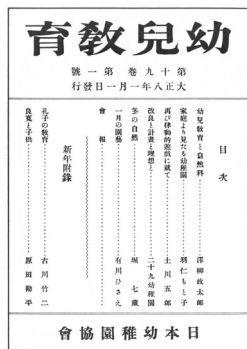
▲画像1 創刊号の表紙
(1901年)

号の表紙を見たときは驚きました。美しいし、モダン。120周年の新しい表紙にピッタリだと思います。1901（明治34）年の創刊時は『婦人と子ども』という誌名でしたね。

浜口 はい。『婦人と子ども』から始まり大正時代には『幼児教育』（画像2）、『幼児の教育』と名称を変え、今に至っています。おそらく日本で一番長く発行され続けている雑誌です。東京市（当時）の幼稚園関係者の研究会と東京女子高等師範学校（女高師）の保姆会とが1896年に結成した「フレーザーベル会」の機関誌としてスタートしました。お茶の水女子大学（以下、お茶大）の前身である女高師の、中村

浜口順子（お茶の水女子大学）
宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長）

久保健太（関東学院大学）
阿部祐美子（区議会議員。元教育専門紙記者）



▲画像2 第19巻第1号 (1919年)の表紙。誌名が『幼育教育』となった頃。

惣三、堀七蔵、再び倉橋惣三、戦後は津守真、本田和子、田代和美らが編集責任者のバトンを渡してきました。戦前は日本の保育界の言論をリードする雑誌だったと言えるでしょう。現在は、保育雑誌が多々ある中のひとつで、だいぶ小規模にはなりませんでしたけれども、子どもが生き生きと生活する保育を実現させるために、身近なノウハウよりも、じっくりと保育を振り返り考えるきっかけとなる材料を提供し続けてきました。表紙に「子ども学の源流を次世代につなぐ」とありますように、過去と未来をつなぐ現在、という視点をもつことが編集上の基本姿勢です。

五六と東基吉という研究者が初代編集者でした。以後、和田実、倉橋

宮里 オンラインでバックナンバーが読めるようになったのはいつ頃からだったでしょうか。

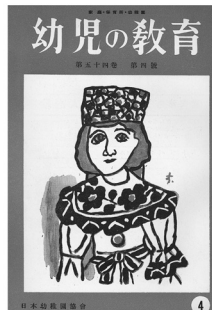
浜口 10年ぐらい前からお茶大図書館ですべて電子データ化し、無料で公開し、今は世界中の国々からアクセスされています。もちろん日本国内からが一番多いですが、中国、オーストラリア、アメリカなどからのアクセスも多いようです。オンライン化に踏み切るとき、こんなに貴重な歴史的資料をあつさり無料で公開していいものか私も迷ったのですが、元編集責任者の津守先生や本田先生にも相談し、特に反対されなかったので決心しました。2011年(110周年)に保育学会で、『幼児の教育』をテーマに自主シンポジウムをやったのですが、昔の広告や表紙を見るだけでも面白いのです。鈴木信太郎さん(画像3)とか武井武雄さん(画像4)、岩崎ちひろさん(画像5)など……。



▲画像5 第60巻第5号
(1961年)の表紙
(岩崎ちひろ 絵)



▲画像4 第56巻第5号
(1957年)の表紙
(武井武雄 絵)



▲画像3 第54巻第4号
(1955年)の表紙
(鈴木信太郎 絵)


宮里 最近、
附属幼稚園にある
ステンドグラスを
デザイン化した図柄
の表紙でしたね。その
原画を見たことが
ありますよ。
季刊に変えたとき
からですね。
浜口 10年前、
季刊誌にしたのも
勇気ある決断でした。
月刊誌としての長い
歴史がありますから
……。出版事情も
悪くなり、だんだん
発行部

数も少なくなってきた、いろいろと迷った時期もあるのですが、附属幼稚園やこども園、ナーサリーという学内の三つの乳幼児施設の先生方と話しあい、やっぱり続けていこうということになりました。若手・ベテランを問わず保育現場の当事者（保育者、保護者、支援者など）の文章を出すほか、研究者の論考、歴史的視点のものなどを意識的に載せるようにし、それからこれは倉橋惣三以来の編集方針なのですが、幼児教育分野に限定せず、異分野の方にも投稿をお願いします。つまり、広い視野から幼児教育を考えられる雑誌にするよう心がけて作っています。

3年前からは、研究者の卵による若葉のような研究やチャレンジ的な研究を、査読付きで発表できる場を設けました。

保育者の言葉をつなぐ

久保 ここ2か月ほど、時間を見つけてはTeag



ポチ（お茶大図書館HPリポジトリサイト）でアーカイブズを読んでいます。先ほども1920年、つまり100年前の『幼児の教育』を読んでいたら非常に感銘を受け直しました。実践者の幼稚園の保母さんたちが、当時「保母」と名乗ってますけれども、文章を書いている。その頃は今よりも保育者自らが書く雑誌が少なかったのだと思ひ込んでました。その新鮮さもさることながら、全国津々浦々の保育者たちが「こういうことが自分の園で起きたのですよ」と投稿している。そのネットワークがすごいなと思いました。鹿児島から倉敷から東北から。1920年の2月号でしたけれど。大分の2月と東北の2月は全く景色が違うのでしょけれど、そういうのが同じ雑誌にあつて。ところで、幼稚園の数は当時どのくらいなのでしょう。1920年は、幼稚園は全国にどのくらいあつたのでしょうか。

浜口 『幼稚園教育百年史』（文部省）によると、

1920年頃は728園、園児数は約6万2千人。5歳児就園率2・8%です。1926（大正15）年には6%になります。

久保 どのぐらいの数の幼稚園の人が読んでいたのでしょうか。発行部数とかはわかるものなのでしょうか。

阿部 創刊50周年（1951年）の号に、幼稚園、保育所と合わせて全国4000ぐらいで、1施設に1冊ぐらいの割合で読まれているという記述があつたので、4000部くらいでしょうか。

久保 1園1冊ですね。

宮里 倉橋先生は、よく日本中を回っていらつしやいましたよね。

久保 それも驚きました。大体夏の7、8月ぐらいになると、倉橋惣三さんがここを行脚しますという日程表が『幼児の教育』に載っていますよね。本当に全国を歩いていったんだなど。この日は大阪にいますとか。それも僕にとつ

ては新鮮だったんです。まず全国の幼稚園の皆さんが『幼児の教育』という雑誌でつながっていることも新鮮でしたし、保育者の先生たちの登場回数が多いこと、研究者に依存しない登場の仕方であること、保育者自らが書く書きぶりが今よりもずっと盛んだったこと。これらを知って、強い感銘を受けました。

浜口 作っている側としてはそれが当たり前になっていったんだけど、あらためて言っていたらとそうですね。できるだけ元の文章を活かそうというのも私たちのモットーです。

保育者として書く機会を与えられて

宮里 『幼児の教育』の歴史を聞きながら考えていたのが、『幼児の教育』がなかったら私は今ここにいなかったということ。大学を出て、縁あって静岡大学教育学部附属幼稚園に勤めて保育者になったわけですけども、大学では幼児教育のノウハウよりも幼児教育の真髓

を学んだ感じなので、現場に入るとわからないことだらけ。その後、東京都の公立幼稚園に勤めたのですが、そこでもめちゃくちゃな保育者でしたね（笑）。そんな私を『幼児の教育』が救ってくれたように思います。「保育の話を書いてみない？」と原稿依頼を下さるんですよ。子どもの生の姿があると面白がってくれる。成功談を聞きたいわけではない。なんだか久しぶりに子どものことを書きながら、自分らしさを取り戻した感じがしました。そうやって書いた原稿を編集の方々が興味をもって読んでくれて……。皆さんいい方たちなんですよね。（1984年10月号に掲載）

日々の思いを語る場として

宮里 もう一つ『幼児の教育』では「耳をすまして 目をこらして」という2ページの小さなものを2年間連載させていただきました（2000～2002年）。自分にとって非常

に意味があつて、今の私をつくつている、自分のスタイルができた連載でした。保育者である私の個性みたいなものは消さなくていいということ、そこにあなたがいるんだからと『幼児の教育』が私に言ってくれたような気がしています。そこからいろいろな機会を得て、今は大学の教員にもなつている。ありのままの保育語りからすべてが始まつたなと思つていきます。

阿部 この頃は毎月発行なんですよね。

浜口 そうです。季節の移り変わりの中で保育者が日々を綴るにはいいペースだったのかもしれない。今のように季刊になると、そうはいかないのかな。

宮里 保育のありのままを表現する機会があったのはうれしかった。感謝しかありません、『幼児の教育』には。

浜口 書く場があるから書く、ということもありますよね。そういう場は明治期の『婦人

と子ども』という誌名だった頃からあつたようです。日本の明治期の保育は、机に座つて恩物ばかりだったと一辺倒に考えられがちですがとんでもなくて、当時の保育者たちが自分たちの心で感じ頭で考えて、子どもを大切にする保育をしていたことの証言とも言える面白い記録が載っています。

アーカイブズを読んで驚いた

阿部 幼児教育という意味では私は素人で、対談に寄せていただいてよいのか迷いました。でも、浜口先生からTea Potでバックナンバーが全部読めるという話を伺つて検索してみたんです。検索のインターフェースは、ちょっと硬い感じですね。

浜口 はい、それは私も感じていました。

阿部 本当に全部そろつていて、いろんな意味でとても面白かつたんです。第一に、古い時代の『婦人と子ども』の頃は読み物としてご

く面白い。この頃はこういう物語を語っていたんだとか、かなの表記に至るまで新鮮に感じました。題材の作り方も、こういうふうな語りかけをしてこんなふうにもと言葉遊びをしていたんだとか、クイズもあつたりして、読んでいるだけでも面白いなあと思いました。第二に、120年の歴史の中のさまざまな時代の空気を伝えてくれます。例えば、戦争。その頃には、どういうふうにも子どもたちに、あるいは親御さんに話していたのだろう。一般の歴史の本では当時の幼児教育がどうだったかはなかなか扱われませんよね。けれども雑誌はちよつとフランクな部分がある。本にまとめると、後世まで読まれることを意識して一般化してしまうものも、雑誌はその時の空気がダイレクトに残るんですよ。顔見知りの方々に語りかける形で残るので、逆に歴史的な資料として伝わるものがあつて、良いなと思いました。

浜口 いろいろな使い方がありますね。

阿部 それから最近の保育の本は「how to」に偏りがちです。『すぐに役立つ』とか『3分でわかる』とか。けれど『幼児の教育』を読むと、何気ない風景の中にもいろんな研究の蓄積があつて、先生方はこういうことを考え、設定しているということが伝わってきます。これは、保護者にとつても貴重です。親としては、よく食べた、ケンカして泣いたとか、仲直りしたなどの出来事だけでなく、もつと何でもないことの中にいろいろな教育が詰まっていると気づけるわけです。そのことが保護者と現場の先生方の信頼関係につながるのではないのでしょうか。

アーカイブズを検索してみた

久保 僕も共感しました。阿部さんは、どういう検索ワードを入れてみたんですか？

阿部 まずは「倉橋惣三」さん。あとは年代

で取ってみたい。「戦争」でも検索しました。
久保 僕も同じように浜口先生に「Tea Pot」を
教えていただいたから。倉橋惣三さんが亡く
なって追悼号が出る（1955年）までを一遍
にプリントアウトして読んでみました。19
40年代からひたひたと戦争が始まっていつ
たんだという空気が伝わってくるんですよ
ね。1944年の休刊直前のもを見てみる
と、「大東亜戦争必勝完遂」という言葉が『幼
児の教育』の中にも登場してきて。雑誌だか
らこそ伝わる空気を、まさに阿部さんがお
っしゃるように僕も感じたんです。確かに、本
ではなくて雑誌だから、というのがありますよ
ね。ちょうど同じ頃、保母養成所の生徒募集
の広告がたくさん載っていたりして。どうい
う思いで保母を急募していたのだろうと思っ
て。倉橋先生、編集部の皆さんは「大東亜戦
争必勝完遂」とか書きたかったのかなとかね。
誌面には子どもたちの姿がたくさん出てくる

わけですよね、ああいうのを読むと切なくな
ってくる。勝手にセンチメンタルを感じてい
るだけかもしれないが。他の媒体で見ると
りも、ずつとシビアに時代の空気をキャッチ
することができる。阿部さんの言うように雑
誌がもつ歴史的な意味を実感したり、まさに
オンラインになったから可能になった体験だ
というの僕も感じます。

宮里 歴史をたどるのは本当に面白いです。
例えば幼稚園教育の中で輪つなぎはいつ頃から
やっているのかと思つたときに、実践記録の
何気ない記述の中に「輪つなぎを作つた」と
いうのを見つたりすると、お！と思う。キ
ーワード検索をしてもヒットするときがある。
『幼児の教育』が封じ込めている大事な時間の
記憶は旅するに値すると思います。

授業にアーカイブズを使う

浜口 今、学部で3年生ぐらいを対象にした

10人ぐらいのゼミで、『幼児の教育』を検索して、なるべく1960年よりも前のものを、何でもよいから自分が面白いと思うものを読もう、ということにしているんですね。すると、例えば最近だと、1957年の「共稼ぎ家庭における児童」という（今は）著名な児玉省さんと宮本美沙子さんが書いたものを選んできた学生がいました。母親が働きに出ると子どもに悪影響があるという結果になっている研究調査なんですね。母親は家において子育てに専念するべきだ、という価値観が垣間見えるので、学生は全体的に批判的に受けとめました。でもゼミでは、60年前は研究者もこういうことを書く時代だったんだということを想像してみようと話しあっていきました。こんな価値観が違うのかと憤慨しながらも、でももし自分がこの時代に生きていたら？ という疑問ももつ。身近に自分事こととして歴史を感じるということでしょう。そこが極めて重要な

と思います。短いものも長いものもあり、学生は興味のある検索ワードをかけて資料を探してきます。「今回はこの資料にします」と学生がメールなどでURLを知らせてくれば、次の授業までにすべての学生がダウンロードして準備してこられるので便利です。

阿部 学生さんが何を面白いと思うのかを見るだけでも面白そうですね。

浜口 そうなんです。予測できないものを持つてくる。私にとつて門外漢のテーマが選ばれることも当然あつて、「そう来ますか」とワクワクします。意外とそういう話題のほうがディスカッションは盛り上がりつつあるかもしれない。一緒に面白がれるからかもしれない。大学院でも十分使えます。

久保 今、「共稼ぎ」で検索したら、すぐ出てきましたよ。

浜口 今は「共稼ぎ」とはあまり言わず、「共働き」ですよ。なぜだろうと考えると、「稼

「ぐ」はお金目的だけど、「働く」はそれだけでは
ないのでは、とか考える。女性の地位向上と
ともに、価値観も使う言葉も変わってきたこ
とを実感する。でも意識は実はそれほど変わ
っていないかも……とか。戦前の文章だと旧
字が多く、そんな勉強もおまけに付いてきます。

『幼児の教育』と保育研究

久保 話を戻しますが。身近なノウハウだけ
ではなくて、真髓・根っこ・哲学の部分を語る
ことが、この雑誌の大事なところかなと僕は
思っています。その点、皆さんと共感していま
す。また、先ほどの宮里先生のお話を伺うと、
その人なりの書きぶりを面白がってくれる編
集方針であることも大事だと思います。

宮里 私は、そこは本当に大事なところだと
思います。

久保 誰でも書けるような文章ではなく、そ
の人でないといけない文章を書いている。そ

ういう文章が100年前のものを読んでいて
も多かったんだなど、話していて気づきまし
た。東北の人と大分の人が同じ文章を書いて
も面白くないし。東北の人は東北の2月を、九
州の人は九州の2月を伝えてくださって。自
分が何に感動したのか、皆さんの話を聞いて
確かめることができました。

阿部 久保先生のおっしゃる1920年代と

いうと、おそらく、幼児教育の研究はまだ若い
分野じゃないですか。そうすると研究者の方
もこの道50年みたいな方もいらっしやらない
わけで、現場の方も肩を並べて、同じ目線で研
究をしたり実践をしたりということができて
いた、というふうにも感じました。学問分野と
して蓄積ができていくと、研究者と実践者が
だんだん分かれて社会を構成できるようにな
り、お互いに遠い存在になっていったのかも
しれません。本来なら実践と研究は離せない
分野だと思います。今のつなぎ方って何かあ

るのでしょうか。

浜口 幼児教育研究といっても、実験とか統計によって行う、現場から距離をとるものもありますし、その一方で実践研究というジャンルもある。『幼児の教育』の歴史を支えてきたのは、現場と研究者の距離が近い研究で、保育者や子どもたちから直接刺激を受けて理論化に挑んだ人たちだったと思います。日本保育学会が戦後、倉橋惣三を会長として設立された当初、最初の研究発表大会の論文は『幼児の教育』に掲載されました。その中には現場保育者のものが多く含まれています。

阿部 保育学会は記者時代に取材に行きました。熱気があつて、大きな学会で。テーマも幅広くて面白かったです。

浜口 現場の先生が年に一度のお祭りみたいな感じですがごく楽しんでいらつしやるし、研究者にとってはここで発表しないとという場所です。戦後、『幼児の教育』の歴史と、現場

と研究者の密接な関係を象徴する保育学会の歴史とが交差した形ですね。

保育の日常の中の研究

阿部 今の保育園は、保育士が研究するどころかすごく忙しい現場になっていて。なんとかしないといけない。現場の先生が振り返りながら、研究をしたり実践ができるのが本来の姿だと思うのですが。保育園を見ていると、特に先生方が一人ひとり研究の視点をもちながら実践することが難しくなっていると感じます。

浜口 『幼児の教育』は、そんな保育者にもちよつと保育を振り返ってもらうよすがになればというコンセプトで作られています。だから、ちよつとバッグに入れておけるサイズ、仕事帰りに電車の中で読むこともできるようにと、ずっと今の大きさです。

久保 幼稚園が振り返りの時間を、子どもた

ちが降園した後には工夫次第でつくろうとしているのは見受けられますけれども、保育園はより厳しいというのを感じますよね。

宮里 そうですね。最近やってみたことですが、給食の時間に幼児クラスの担任が休憩を兼ねて事務室に降りて、私や施設長、主任がお母さんというかおばあちゃんという感じ子どもたちと食事をするというのを始めました。保育士同士、1時間程度の時間の中で食事をして語りあって、なんだかすつきりした顔で保育に戻ってくる感じがいいなと思っています。まだやり始めたばかりで、もちろん毎日というわけではありませんが。

浜口 「ノンコンタクトタイム」という名前がついて最近ようやく、保育者が子どもから離れる時間の重要性が注目されています。実際はその時間をチームワークと知恵でこじ開けている感じでしょうか。宮里先生の園では、「こじ開ける」というより、都合をつけあった

者同士、子どもも含めて、新鮮なりフレッシュ時間にもなっているような。

宮里 0、1、2歳のクラスでは、子どもたちが午睡しているそばで連絡帳をつけたり小声で打ち合わせしたりしています。呼気チェックなどそばを離れない理由があつて。そこも少しの間代わってあげられたらもう少し明るい所で話せるようになると思ひ、手伝えるときは声をかけています。保育者は子どもをそばを離れないという使命感をもっているけれど、子どものそばを離れて語る時間って大事で、そのためには協力的体制と工夫が必要だと思ふ。

保育者と研究者のコラボレーション

久保 大学の先生が園のミーティングに足を運んで一緒にミーティングする、みたいなものは月に1回ぐらいやっているんですか？

浜口 学内の三つの園に大学の教員や院生が

出入りすることは多いですね。学生が観察実習やインターンシップで行くので、その園に学生の記録を戻しますし、保育者のほうから大学の授業に出張していただくこともあるので、互いに学ぶ機会になっています。

久保 ハンガリーとスウェーデンを、ここ3、4年の間に視察してきたのですが、保育者だけで語りあう場もありながら、一方で大学の研究者も足を運んで、研究者と保育者と一緒になって語り合いをしているんですね。

浜口 『幼児の教育』の編集に携わった中村五六も主事（園長）だったし、和田実も倉橋も。津守真は園長にはならなかったけれど、皆、幼稚園をフィールドに研究してきた人たち。倉橋の誘導保育論の元にある系統的保育案は、当時の附属幼稚園の先生たちとの共同作業で成り立った研究で、『幼児の教育』に連載して発表されました。大正期、倉橋が主事になって書きためた保育論は逐次『幼児の教育』に連載

されますが、それを編集して『幼稚園雑草』にまとめたのは附属幼稚園の先生たちでした。津守は自分が幼稚園に入って観察した考察を「保育の体験と思索」として連載し、著書になりました。附属幼稚園だけではないですけれども、現場に入って自分たちの研究の肥やしにして、それを『幼児の教育』に発表するということが今まで続いてきた。お茶大の中でそういうサイクルができていたことが、『幼児の教育』にひとつの形となって出ている。倉橋のいまだに読まれている『育ての心』も『幼児の教育』に連載されました。短い文章が多く、この本は現職者の研修の導入に向いているなと思います。詩的なフレーズにインスピレーションを受けて、保育の日常について話しあうきっかけづくりになります。しかも、ほとんど本誌に掲載されていたので、ダウンロードして読める。お茶大の社会人対象の研修授業（保育・子育て支援ラーニング

プログラム」はオンライン授業ですが、ダウンロード教材として活用しています。

宮里 保育者は保育を語ることが好きだと思います。語って聞いてもらえるだけで幸せなんでしょう、さらに別の視点で、保育者を尊重するという基本姿勢をもちながら別の視点を投げかける人がいると、保育を営んでいる人自身が、保育の中で感じ取ったことの価値の深さにもう一つ気づくみたいな。価値を教えられるのではなく、そこに光を当てるみたいな感じがかかわってくれる研究者とのコラボが、豊かな実践を支えているのかなと。

阿部 実践の中に、研究者が意味を見いだしているわけですね。

久保 僕自身が教育哲学の出身なんですけれども、哲学はともすると言葉ばかり難しくくてちんぷんかんぷんな呪文みたいな言葉を話しているのではと思われがちなんです。しかし、もっと身近な言葉で、これはどういうことな

のだろうと一緒に面白がりながら世界を調べていくというのが本来の哲学です。最近では、心理学的な実験、統計、数字で記述できるようなデータになるようなエビデンスが求められる、そうした学問がはやっています。でもそういう学問ばかりが威力をもつと、保育者の人がますます語れなくなるというのが、僕が抱いている危機感です。保育者が「私の言っていることは私の主観でしかありませんが」と前置きをして話し始めたりすることが多いんですよ。主観だから良いのではないかと僕は伝えていきます。保育者の中で、客観的なエビデンスを示さないとダメだという強迫観念に捉われている人が増えているように思えて、僕が危機感をもっているのはその点です。『幼児の教育』がもっている値打ちは、君が見つけた宝物を君の言葉で語って、周りのみんなまで面白がるよというスタンスにあると思っ

ていました。

新連載の新しい試み

浜口 今号から始まった新しい連載で、2次元コードを使って保育場面の様子のYouTubeが視聴でき、それを見ながら保育を語ろうという企画（本誌P26～31掲載「育ての心」で語りあう）参照）。誌面が平面から3D的に奥行が出てきた感があります。

久保 まだ方法は試行錯誤中ですが、ここから先は読者の皆さんがコメントを寄せましょう、みたいなことができるのではと思っております。さらに保育者参加型を目指せるのではないかと思っております。

浜口 そういう技術的なことに抵抗がない世代に読者層が広がっていくのが楽しみです。新しい研修の場づくりになれば。

宮里 日本保育学会も、保育者と研究者が学びあう会で、今年はオンラインでの開催ですね。皆で語りあうというところに意味がある。

5回目になるお茶大こども園フォーラムも3月下旬にオンライン発信になりました。

阿部 今日の座談会が始まる前は、私はどういうことを話したらいいのかしらとドキドキしながら参加したのですが、『幼児の教育』が保育者と研究者の方々の場として機能してきたということ、そこに哲学があったこと、目の前に流れないままに生き残ってきたことを知り、本当に有意義でした。世界的にはリベラルアーツが見直されている中で、日本でも哲学の大切さが再認識される時代が来ると思います。その日が来るまで、『幼児の教育』は哲学というものを大事にしながら生き続け、花開かせていただければと思います。

浜口 前向きに生き残りをかけてチャレンジする希望が湧いてきたところで。

（2020年11月14日 Zoomにて開催）